

新潟産業大学報

青海波



第3号

発行日 平成3年3月25日
 行集 新潟産業大学
 編集 新潟産業大学広報委員会
 新潟県柏崎市大字軽井川4730番地
 TEL 0257-24-6655
 FAX 0257-22-1300

我創る、故に我在り

(creo, ergo sum)

「第一回卒業生を送る年に臨んで」

学長 金田 一郎

人の学力が、学問以前の段階で
 ある受験勉強の結果で評価される
 傾向、それは、日本が後進国
 であった時代の名残とも言える。

わが国は、幕末の開国以来、欧
 米先進国に追い付き追い越すこと
 を目標に突走ってきた。その過程
 では、欧米の進んだ学問・技術を
 効率よく吸収することが至上命令
 であった。教育においても、いかに
 効率よく学習するかが尺度とな
 り、評価基準となった。そのよう
 な教育を推進する能率的なシステ
 ムが、つまり旧帝国大学を軸とす
 るこれまでの教育制度であった、
 と言える。高等教育の段階でも、
 お手本に従って効率よく学習する
 —あくまで、「学習する」こと
 が基本に据えられた。そこでは、
 本来、研究の基本とすべき「創
 造」は軽視されることとなった。

場合によっては、それは、効率的
 学習を阻むものとして邪魔物扱い
 された嫌いもある。今や、この教
 育制度は、その使命を終えた。

「日本人は創造性がない。依然
 として欧米の模倣をしているだけ

だ。」——外国人の間で、最近改
 めてそのような言葉が囁かれるよ
 うになった。

ところで、日本人は本当に創造
 性のない民族なのであろうか。私
 は必ずしもそうとは思わない。歴
 史を振り返ってみると、日本人の創
 造性を示す事例は決して少なくな
 い。

古くは、紫式部が当時としては
 世界でも珍しい本格的な写実小説
 を書いたこと、関孝和、建部賢弘
 安島直円らの数学上の業績などを
 挙げるができる。ヨーロッパ
 の印象派の画家やアール・ヌヴ
 の印象派の作家やアール・ヌヴ
 の浮世絵やその他の日本の伝統
 的美術の創造的要素も、注目に価
 する。更に、近代以降に関しては
 幾つもの事例を挙げる事ができ
 る。

もっとも、創造的な仕事という
 のはアイデアの問題であるから
 留学先の師のアイデアと指示の
 下に行われた実験で、たまたま日
 本人の弟子の試験管の中に成果が
 現れたことによって、「その発見

は本当は日本人によってなされた
 のだ」といった手の話をよく聞く
 が、それは全くのナンセンスであ
 る。そのような事例は除外しなけ
 ればならないが、明治の時代、未
 だ研究の環境が整わなかった状況
 の中で、日本人のアイデアによ
 ってなされた幾つかの世界的業
 績を挙げることができる。池野成
 二郎、平瀬作五郎による、ソテツ
 とイチヨウの精子の発見、鈴木梅
 太郎によるオリザニン（ビタミン
 B₁）の発見等々である。

こう見てくると、日本人が創造
 性に欠けた民族だとは考えにくい。
 問題は、これまでの教育体制、教
 育制度にあったようである。今や
 日本の教育体制をもっと先進国に
 ふさわしい、創造性重視の形に変
 えることが急務とされている。

しかし、人間は、長い間慣れ親
 しんできたものを変えることには
 苦痛を感じるものである。伝統や
 因習の重みがある場合は尚更であ
 る。

私は、伝統や因習に縛られない
 新設大学には、教育体制の変革の
 上でイニシアティブを執るべき責
 務があると考えている。新潟産業
 大学は、文部省への設立申請の段
 階から、主体性と創造性の涵養を
 建学の理念として主張してきた。
 主体性と創造性は表裏の関係に
 ある。大学の特色という点、最近

は決まって「国際化」が持ち出さ
 れる。それ自体は結構な事である
 が、国際化が、アメリカ化や無国
 籍化にならぬよう留意したい。国
 際化の時代にこそ、主体性が重視
 されねばならぬであろう。ここで、
 先駆的な主体的国際人であった新
 渡戸稲造（五千円札の）を思い出
 す。私は、農政学の先達として初
 めて彼に関心をもったが、彼はま
 た東京女子大学の創設者でもある
 大学づくりに関しても教えられる
 ところが多い。

更に関連して、新渡戸を含め、
 明治の多くの指導者に大きな影響
 を与えたクラーク博士を思い出す。
 彼の日本滞在の期間は驚くほど短
 かったが、多くの人達に教育的衝
 撃を与えた。

本学には優秀な教授陣が揃って
 いる。本学の教育の中で教育的衝
 撃が生み出されることを期待した
 い。そして、やがて本学を巣立つ
 主体的・創造的人材が、地域の、
 また日本の産業界で、更に国際的
 舞台で活躍することを期待する。
 ここで、人間の現実存在の原点
 は創造にあること、人間は、
 Homo labor（ラテン語で「製作者
 たる人間、作る人間」）である以
 上に、Homo creans（ラテン語に
 よる筆者の造語で「創る人間」）
 であることを強調したい。——
 creo, ergo sum.

学生の就職に関する 本学の取組みについて

就職委員会委員長 教授 坂 東 淳 悦

この三月には、採用側の企業と

送り出す側である教育機関（国公私立の大学、短期大学、高等専門学校、高等学校で構成）の代表者、そして文部省で構成する就職問題代表世話人会で大学生の就職のための会社訪問は八月一日以降、企業の採用内定は十月一日以降という事が正式に決定され、俗にいう「平成三年度就職協定」が成立をみました。

昭和六十三年四月に誕生し、平成四年三月に第一回目の卒業生を社会に送り出す事になる本学も、前述のスケジュールに沿って、学生に対する就職指導活動を推進していくこととなります。まさに就職戦線の序盤から、いよいよ本盤突入という状況下にあるといえます。本学では、開校以来、教授会の中に就職指導委員会を設置し、事務組織としての就職指導室をリードしながら、種々の活動を行なってきたり、この四月からの本盤に向けて、より一層の体制の引き締めをはかりながら、成果達成に向けて邁進したいと考えてお

ります。

これまでは、求人のための企業に対する大学案内および学生に対する就職の手引きの作成・配付、二度にわたるアンケート調査および職業適性検査の実施、公務員志望の学生のためのガイダンスの実施や資料の提示、更には、特別課外講座の開設、外部講師を招いての研修会等を行ってきたり、対外的にも、県内出身者（全体の78%）、県内企業志望者が（71%）という事で、主に県内、および隣接県の企業を招いての、昨年十一月の新潟市での第一回目の就職懇談会の開催、また、県外出身学生が増加傾向にあること、より広い地域からの学生の受け入れ、そして学生の希望企業や地域の多様化に対応するため、この春には、東京でも企業を招いて懇談会を実施する予定にしております。また三月中旬には、上場企業のすべてに

対し、本学卒業生の受入れ要請のための御願ひも致してきており、これからもこれらの活動を継続させるとともに、学生の希望を個別

面談やゼミナールを通して把握しながら、個別的な企業とのコンタクトを確立してゆきたいと考えております。本学としては、情報化・国際化・地域社会の活性化といった今日の社会的要請に適切しうる魅力ある人材の輩出という大学設置の趣旨に答えるためにも、学生の資質の向上により一層努めるとともに、組織社会に十分対応しうる人間の魅力に富んだバイタリティー豊かな学生の育成が第一であり、講義を通じた教養あるいは専門知識の修得だけではなく、クラブ活動や教員との人的交流を通して、トータルとしての学生の資質向上が最も大切であると考えております。そのことは、とりもなおさず、受入学生の質の向上に直結し、対外的な大学の評価につながるものと思っております。その意味で、学生の就職問題は大学をあげて取り組むべきものであり、最重要課題として位置づけているのであります。

新設大学である本学は他大学と異なり、新四年生の場合、先輩がいない事もあって、先輩の就職についての苛立ちや苦悩を、まのあたりにしていないせいか、学生自身の中に、就職問題についての取り組みがまた十分確立されておらず、アンケート調査の結果をみても、親元から通動できるとか、慣

れた地域の企業を希望するとかいう学生が多く、まだまだ甘さが目立っており、生涯の重大事という認識に欠ける面が多く、このままでは将来悔いを残すことになりかねず、より一層の努力と人格の陶冶を期待したいと思います。

この一月の有効求人倍率が一、四四倍であり、景気の不安材料であった湾岸戦争は終結し、企業の深刻な人手不足感はまだ解消していないといっても、今日の企業は、産業の近代化、国際化、技術開発の促進等に真剣に取り組むとともに、良質な労働力の確保を極めて重要な課題として位置づけております。

従って、これに對峙しなければならぬ学生は、相当の覚悟がないとこの就職戦線を乗り切ることができないし、まして、「三K」のない職場とか、週休二日制、という安易な基準で企業を選択するようないい事はないのであります。そのような現状を鑑みれば、今後は、ガイダンスや個別面談



平成2年度 企業と大学との就職懇談会 新潟産業大学

を通して、この問題について真摯な対応ができるよう、より一層の指導を行なってゆく必要があると考えております。

「おわりに、就職指導委員会を中心に、学生の進路選択にあたって、ミス・マッチが生じないよう、最大限の努力を傾注したいと考えておりますが、学内外の関係者の皆様の強力な御指導、御力添えを、この紙面で改めて御願ひしたいと思います。そのほか、就職指導委員会の

公開講座の試み

研究所長 教授 豊 福 英 利

本学は昭和六十三年四月開学以来開かれた大学を目指す活動の一環として公開講演会を開いてきた。これは地域社会の文化活動の一端を担うことによつて、地域の文化的水準の向上に寄与し、学問の社会への還元を計ろうとするものである。

平成元年度に第一回として石川健一教授による『グローバル時代の金融革新』、箕輪真澄教授による『奥の細道越後路の迷』を本学講堂において行ない、多数市民の参加を得たが、キャンパスが市中心部から隔たっており、交通手段に随時性がないため所期の目的に添うには市中心部で開催するよう期待されていた。

そこで平成二年度は市中心部の



産業文化会館を利用し、第二回として十月六日下野恵子講師による『年金の話』、川村克己教授による『フランス文学あれこれ』を実施した。三月下旬には、第三回としてエネルギーホールで梅澤精講師の『酒の社会学』、鍋田英彦助教授の『これからの街づくりと商店街』を行なった。

第二回講演会当日は天候が急変し土砂降りの雨となり聴衆の参加が危ぶまれたが、予想を上回る多数市民の参加を得て始まった。

下野講師は年金の基本的考え方から説き起こし、個人的配慮を超えた社会的変動の不可測性によつてもたらされる幸・不幸や老後の不安を経済的側面から制度として保障し解消しようとするものと定

義し、次いで公的年金の種類に進み積立方式と賦課方式の長短を論じ、我が国が採用してきた積立方式が世界的見地からは少数派に属することを先進諸外国との比較によつて示した。その日本も昭和三十年ごろから旧来の純粋積立方式へと移行しつつあり、一九八六年の年金の一本化をめざした年金制度大改革によつて大略半々程になった。講師私見によれば全額賦課方式こそ望ましいが、これは日本型家族関係することであると述べた。

初の公開講演に臨む緊張と初々しさが見られたが、話の内容は大胆な問題提起もあり、年金をただ受けるだけの受動的対応から、制度の前提となる思想にまで立ち戻つて考え直すには格好の講演であったと思われる。

一方、日本フランス語フランス文学会会長でもある川村教授の講演はいかにもフランス文化を語るにふさわしい瀟灑な語り口の旅の話で始まった。食を論じて「食は文化の粋」というような大上段の野暮の言は片言隻句もなく、フランスの田舎の食べ物の美味しさ、廉価さを語り乍ら、ヨーロッパ全域に共通する文化的特徴である。「自国の風土にしっかりと腰を据えた生活文化こそ真に人間を育む」というヨーロッパの基調低音をまず響かせた。旅は時代を遡つて駆け抜けフランス語の語源を探

索してオック語とオイル語に至り、今はその名残をもとめぬ徹底したラテン語系化を媒介として古代ローマ帝国の植民地支配の文化政策に及び、我々の対外文化政策の貧困を陰画として暗示し、転じて『ことば』の美しさと母音の豊かさとの相関を示しつつ現代日本語の醜悪さに至つた。

掉尾の高揚は詩人達への回想によつてもたらされた。南仏プロバンスの小市オランジェの風光裡にあるかと思わせる語り口で聴衆を誘いつつ、上田敏訳の海潮音の中からテオドル・オーバネルの短詩を喚びおこす。

小鳥でさえも巢は恋し／まして蒼穹わが故郷よ／生まれも里もハライソオ。

うみのあなたののはるけきくにへ
いつもゆめじのなみまくら／なみのまくらのなくなくぞ／こがれあこがれたるかな／うみのあなたのはるけきくにへ。

この詩の朗唱に始まる南仏の旅への誘いは聴衆をプロバンス詩人群からドーデーの「風車小屋だより」→「アルルの女」からバゼーの音楽に及んで、さわやかな陽光のもと、金色に波うつ麦畑を渉る風、の音にも似た響きを聴衆の心裡に共鳴させつつ、今世紀最高の知性と称えられたポール・ヴァレリイ生誕の小港市セートへと至つた。

陽光、光きらめきはるかな地中

海、影を失つた海辺の墓地の真昼時、二十世紀最高の知性は自らの精神において叙情する。
鳩の歩みて静かなる薨の屋根は／松林、墓標の隙にわななきて
／今し正午の、炎もて織なすは、海……／風今し立つ生きむとや努めさるべき。……

我々はヴァレリイによつて地中海に聴くことを、セザンヌによつてサント・ヴィクトリアリアル山に観ることを教わる。自然が芸術を模倣するとはこの謂であらう。

最後に柏崎市民に贈る言葉として、パリの「波に揺れる帆船」の市章にまつわる言葉「揺れるけれども沈まない」を挙げ、日本海はやがて東シナ海、インド洋を介してセーナ川の水に連なると視野のグローバルな拡大が語られた。

深い学殖に育まれた蘊蓄を傾けての講演は恰も豊潤の美酒を味わう如くであった。

文化に関する事柄の成果を早急に期待するのは非文化的の発想であらう。天空より降り来る雪は山野を埋み、春地下に潜み木々の発芽を促し、やがて歳月を経て大河となる。我々はこの片々の文化の香滴を点滴し続けることによつて、やがてヴァレリイが語つた如く、「地中海に一滴のロゼを滴らせれば、海はバラ色に香る」のなら、日本海も亦豊潤の美酒に匂い立つことを期待している。

平成3年度入試から

経済学部長 教授 中村 忠 一

平成3年度入試は、本学にとっ
ては画期的な入試になった。昨年
度までとは、その様相は大きく変
わった。この変化は、つぎの二点
に集約できる。

第一には、量の変化である。推
薦入試を含めると志願者数は約三
〇〇〇人、定員の二〇倍に達した。
この入試の中核となる一般入試
・本学センター入試についてみる
と、定員二一〇人に対し志願者数
は二六六二人と二・七倍の高競
争率となった。実質競争率も七倍
を超えた。

全国的にみて、本年度の延大学
受験者数は、前年比はほぼ一〇%の
増加である。本学一般入試(本学
入試センター試験を含む)の志願
者は、ほぼ同じ時期に行つた昨年
の一般一期志願者の七七〇人に比
較すると三・五倍。つまり二五
〇%の志願者増加という注視に値
する数字である。

第二には、質の変化である。一
般入試合格者の最低点が大巾に
アップした。一〇〇点満点に換算
して一〇点も最低点がはね上がっ

た。得点率一〇%という上昇であ
る。昨年度合格者の平均点が、今
年度合格者の最低点となった。質
的競争は激化した。

本学大学入試センター試験の合
格者は、いずれも新潟大学・富山
大学・信州大学など地方国立大学
の合格ボーダーラインを超える成
績点を大学入試センター試験で獲
得している。本学不合格者で地方
国立大学合格者もかなり多い。

この「量と質」の変化は、大学
受験者層のピーク年(平成4年
度)の前年ということもその因の
一つではある。だが、この変化が
とりわけ本学で顕著であったのは、
地味ではあるが実効ある大学のイ
メージアップ戦略が、大きく作用
し効果を発揮した結果とみてよい
だろう。

このイメージアップ戦略の中心
は、大学入試センター試験への参
加にあった。この参加は、社会科
学系の新設大学として、「良い大
学」志向のイメージづくりにあっ
た。中央紙をはじめマスコミはこ
ぞって「国立大学離れ」記事を掲

げた。これは大学受験者の急カー
ブな増加傾向にありながら、ここ
数年国立大学受験者の伸びなやみ
の数字を表面的に扱えたもので、
この見方は間違っている。

この数字は「離れ」現象を示す
ものだけではなくて、数学・理科
の二教科から「逃げる」という現
象を示すものである。今なお、高
校生には、「国立が私立より格が
上だ」という意識が根強く残って
いる。

一般入試には、国立大学は過去
から蓄積された全体的基盤を持ち、
教員の質も相対的に高いという評
価を受けている。私の四〇年の大
学教員としての経験からみれば、
本学における教員の質は、地方国
立大学と比べて優れていても決して
劣ってはいない。

「良い大学」のイメージをつく
り、定着させる第一の鍵は、この
人材を最大限に生かし、日本の大
学の先頭に立って現代にもっとも
ふさわしい大学教育を実現するこ
とにある。このためカリキュラム
の再編集作業が現在進行中である。
この作業と同時に、物的環境づく
りも、そのマスタープランの作成
が大学の総意を結集してすすめら
れている。

三月十日前後のこと

教務部長 教授 佐藤 一 弥

戦後四十五年も経過して今更戦
争体験でもあるまいといわれるか
もしれないが、僕にとって忘れえ
ぬことがある。それは夜毎に夢魔
night mareのごとく僕を苦しめて
きたが年月のたつまま、いつしか
茫茫と過去のうちに消え去って
いた。ところが今度の湾岸戦争の映
像を見ていた時、突如として僕の
記憶の底からあの東京大空襲のこ
とがよみがえって、バグダッドの
空爆とオーバードラップして見え
たのである。あの映像を見ているう
ちに孫娘が「あ、花火大会みた
い」といった(テレビゲームみた
いとはいわなかった)時、我にか
えったほんの一瞬の出来事であ
った。最近よく問題にされる「臨死
体験」では一瞬のうちに自分の生
涯をみるそうである。あるいはそ
れに似た現象であったかもしれない。

その時僕は千葉県松戸市の陸軍
工兵学校の壕の中にいた。夜半に
非常呼集がかかった。三月九日の
ことである。その夜は降るような
星空であったと記憶している。B

29重爆撃機の編隊は房総半島から
千葉の上空で旋回して、くり返し
くり返し東京へ向かって行った。
それはまるでコンドルが翼を拡げ
て地上の獲物をねらうようであっ
た。すでに制空権を握られていた
ので、超低空で塔乗員の姿が見え
たように思えた。両翼端と尾翼の
あたりに妙にチカチカする光があ
り、大地をゆるがすごうごうたる
爆音は、今も耳底に残っている。
東京の上空にさしかかる度に、パ
ラパラと焼夷弾の火の粉をまき散
らした。それはヒラヒラとまるで
蝶のように、スターマインの残火
のように舞い下り、地上に達した
と思うや夜空を一面に明るく染め
た。スカッドミサイルが着弾した
時のように。

この時落とした焼夷弾は油脂焼
夷弾であった。一米ほどの六角形
の鉄板の筒に麻布に含ませた油脂
がぎっしり詰められ、蜂の巣のよ
うに三十六本が二段に鉄のバンド
で締められ、上下に鋳物の厚い蓋
があった。上蓋には amiable chis
ter (可愛い一房——何とぞぎけ



た話ではないか」と彫り込んであった。上蓋に雷管のついたプロペラがあって、その廻転によって一定の高度に達した時、雷管に作動して七十二本が火のついたままバラバラと落下する。着地すると夫々の筒の底に雷管があって一斉に中の火のついた油脂を吐き出す。油脂は建物のどこにでもベトリとついて忽ち一面の焦土としてしまふのである。長岡市が数時間のうちに焦土と化したのもこの焼夷弾によるものであった。その構造は至って簡単なもので、ミサイルのようなハイテク兵器ではない。しかし、当時の日本のように木と紙の建物の密集した市街にはかえって恐ろしいものであった。

翌十日の拂曉を待って僕等は東京へ向かった。道路の整理と死体收容のためであった。今のようにジープでかけつけたわけではない。各種の機材をかついでの徒歩である。両国橋を渡るころ、煤煙で真黒の人々が布団一枚を頭からかぶって続々と避難してくる行列に出会った。僕等には言葉もなかった。

橋を渡った先の市街地は正に地獄であった。道路は一面に倒れた電柱と電線がからみあい、両側は瓦礫の山であった。それは煤煙で薄暗くかげり、方々の焼杭がまだ火を吹いていて、あたり一面有機

物の焼けた臭いが鼻をついた。所々に異形のもの折り重なるようにしているのが眼にとまった。少し近づいてみると黒焦げの死体であった。あるいは四方にとび出すような姿で、あるいは親は子をして倒れていた。すでに性別も分からず、ただ硬直した灰黒色の人形のようにであった。

一体どれほどの数の遺体をトラックに運んだことか、おぼえてはいない。あの遺体がどこに埋葬されたかも知らない。ただこのことだけは今はっきりと眼に浮かぶのである。それは一応の片付け作業を終えてある焼跡の土台石に腰を下ろし飯盒の飯を食べていた時のことである。何となく背後から呼びかけるような気配を感じた。ふとふり返ると、とり残された親子の遺体二つが、真新しい菰をかけられてあるではないか。飯盒を放り出して合掌しながら收容したことであった。

僕が「地獄を見た」のはこの時が初めてではなかったような気がする。これより少し以前に同僚の将校が爆破ミスで上半身吹き飛んだ時、又經理の将校が糧秣計算ミスの責任を感じて割腹した時、僕はやはり「地獄を見た」思いであった。こんな思いで焼跡に立った時、一面の焦土の中で唯一組の

中年の夫婦に出会った。顔も体も真黒にして早くも焼跡から残った家財を掘り出していたらしい。僕の顔を見るなり「これからが本当の戦争ですよ。私達は最後の一人になっても戦いますよ。」といった。僕はその時、これが人間であろうか、人間とはこのようなものなのか、と思った。何故かしらこの夫婦の言葉は空々しい、空疎なものとして僕の胸をよぎったのであった。

僕等の一期前の連中は皆南方作戦に送られ、途中の空爆で海底に沈められた。この頃から誰いうとなく僕等は「砲部隊」だといわれた。近々のうちに相模湾に出撃して上陸部隊を迎え撃つのだ、という情報が流れたのである。僕は「いよいよその時が来た」と思った。当時としては生還は到底考えられぬことであった。

僕が終戦を迎えたのは、栃木県の山中で、連日爆雷を抱いて戦車に体当りをする訓練をしていた時のことであった。重大放送があるというので正装して小学校の校庭に中隊を整理させていた。放送は雑音がひどく半分も聞取れなかった。真夏日で周囲の蟬時雨のせいもあったかもしれない。どこからともなく、これは陽動作戦かもしれない、いやそうに違いない。陽動作戦だ、という情報が流れて

きた。僕は砲部隊なら海で疎になるも山で疎になるも同じではないかという気がしていた。とりあえず必要な兵器、糧秣をととのえ、栃木の山中深く潜入する計画を練る矢先のことであった。連隊長が馬をとばして来た。どんなに急いだかは馬の口角が泡を吹いているので分った。

「やめろ、やめてくれ。ここで大死するな。貴官には学問を通じて祖國を再建する任務があるではないか。」ふり仰ぐと連隊長の眼からは滝のごとく涙が流れていた。鬼のような連隊長の眼からであった。僕はこの時この鬼の中に真の人間をみた気がした。僕には一言もなかったのである。

終戦処理を終えて郷里に還ったのは、まだ残暑もきびしい頃であった。母は五年前に亡くなり、父は病床に伏していた。妹達は毎日の食糧確保と父の看病で疲れ切っていた。僕は軍刀を抱いたまま、縁側に大の字になった。空は抜けるように青かった。その中を偵察機が一機爆音を響かせて去って行った。けだるい空気を爆音が一層かき立てていた。その爆音を聞いていると何故かとめどなく涙が頬を伝った。父はその年の暮に慌しく世を去った。

僕の戦いはその翌日から始まったのである。

＊ ＊ ＊
最初にふれたように、たまたま湾岸戦争のテレビ映像がバクダットの空爆を放映していた際に、一瞬文字通り走馬燈のように僕の記憶の底からよみがえったことを書き記したのである。

＊ ＊ ＊
学報には既に諸先生の味読すべき多くのことが掲載されている。今更僕が四十五年も前の、しかも「地獄を見た話」など載せてよいものかどうかと何度も躊躇したが、あえて貴重な紙面を汚すこととした。

＊ ＊ ＊
戦争はテレビゲームではない。我々は平和になれて、とかく平和の尊さを忘れがちではないのか。しかも戦争を体験した者は多くを語らない。

＊ ＊ ＊
とにかくこれで、永年の胸のかえが下りた気がするのである。



海外研修の報告

英語学担当講師 西成田 道夫

平成二年八月末から三週間、国際交流と語学研修のために、学生十一人を引率してアメリカへ行ってきました。最初の二日間はサンフランシスコに、最後の二日間はロサンゼルスに滞在し、市内を見学しました。今の日本にはアメリカ

カに関する情報が溢れており、いざ現地に行ってもテレビか映画で見たような景色が多いのですが、小さなことではおやっと思うことがあります。たとえば駐車場には「バックで入れるな」と書いてあります。広い所で運転しているの

「学生海外語学研修」実現までの経緯

学生海外研修委員会 助教 沼岡 努

昨年四月二十四日から実質七日間のスケジュールで学長と共にアメリカの幾つかの大学を視察・訪問して来た。これは本学教育理念の一つ「知的国際的人材の育成」のための具体的一計画「学生海外語学研修」の実現に向けての準備的仕事であった。視察・訪問校は西部、中西部、北東部の三地域にわたり、計十校であった。(具体的には、スタンフォード大、カリフォルニア大バークリー校、UCLA、ノートルダム大、南カリフォルニア大、チャプマン・カレッジ、北アリゾナ州立大、イリノイ州立大、ハーバード大、MIT)

帰国後これらの大学を個々に、語学センター教育(特にESLプログラム)の充実度、周辺地域の治安状態、自然環境、宿泊施設、等々の観点から十分検討を重ね、結局本学学生を送るにふさわしいと思われる大学として、北アリゾナ州立大とイリノイ州立大の二校を選んだのであった。

以上のような経緯を背景に昨夏、「第一回新潟産業大学夏期留学プログラム」を実施し、大学側からは英語学専攻の西成田先生に御同行いただいた次第である。

で車庫入れは苦手なのでしょうか。

さて交流と研修の地は、カリフォルニア州の隣のアリゾナ州のフラッグスタッフという町にある、北アリゾナ大学です。学生数は一万二千、構内は広く、屋内フットボール場さえありました。各国からの留学生がかなりいましたが、日本人留学生は四人だけでした。

ここで学生は、外国人への英語教授法を専門にする教師による授業を受け、同時に当地の学生と交流して英会話の練習をしました。授業は初歩から始めたので、内容は非常に簡単な

単だが、英語では聞き取れず、わかっても言えず、学生はかなり困っていました。

頭の中で日本語で考えることは大学生でも小学生並のことも言えないわけではないというの、一定の年令に達してから、外国語での会話を習う際に最も不愉快な障害でしょう。

しかしこれを乗り越えなければ先へ進めません。

このことは相手のアメリカ人にとってもイライラすることであり、話が全然進まず、途中

で投げ出したくなることもあった

と思います。しかし当地で学生の世話をしてくれた、北アリゾナ大学の学生及び院生は非常に親切な人たちで、辛抱して聞き、間違いは丁寧に直してくれました。さらには時間を割いて、自分の車で市内や郊外を案内したり、家庭に招待してくれたりしました。おかげで学生は楽しく学び、いい思い出を持って帰って来ました。

しかし別の面から見れば、苦勞少なかったのは残念だったとも言



えます。ある年令に達してから、外国語での会話を習得しようとするならば、意志が通じないもどかしさ、言いたいことも言えず、一方的にまくし立てられるくやしさに耐え、それを克服しなければならぬ。単に「必要性」を感じるだけでは不足である。実際に会話する必要に迫られなければならない。そのためには、あまり世話を焼かず、一人で突き進むことも必要になる。

一カ月に満たない期間であったが、その内の何日間か、あるいは一日の内に何時間か、世話をする人なしにまったく一人で、日本語が全然通じない環境に身を置かせて、果たして自分がどの程度耐えられるか、どの程度意志の疎通ができるか、自分の会話力ほどの程度かなどを見定めることができた。今後の学習方法と進路を考えるに際して、非常に参考になり、目には見えないが、得る物はより大きかったかも知れない。

短い期間であるから、楽しい思い出を除けば、聞き取りの上達と挨拶や簡単な会話が、考えずとも反射的に口から出るようになるくらいが目に見える効果であるが、見えない効果の方が長期的には有益だろうと思う。

学術散歩

花見の社会学

社会学担当講師 梅澤 精

わたしの専攻している《社会学》は経済学や政治学、法学などにくらべて、ふつうの人たちにはあまりなじみがないようです。大学を卒業しても、「そんなのあつたかな」程度だったり、あるいは《大人の社会学》とか《歌舞伎町の社会学》などとテキトーに使われるので、なんだかいかかわしい風俗学だ、いやいや《学》以前だ、と思っている人も多いかもしれません。でも、社会学はレッキとした学問です。今を去ること一五〇余年前、フランスのオーギュスト・コントという人が『実証哲学講義』という全六巻の大著のなかで《社会学 sociology》ということばをつかったのが最初。コントという人もあまりなじみがないかも知れませんが、パリ大学のソルボンヌ広場にはかれの立派な胸像があるし、《オーギュスト・コント通り》というのもあります。

コントの社会学は、フランス革命のあとの混乱した社会をどのように再建したらいいのか、どんな社会が望ましいのかという課題に答えるために生まれたものです。そこで、かれは歴史的な大変動期には、社会は全体的にとらえられなくてはならない、経済とか政治とか法などの部分的現象を個々バラバラに考えるのではなく、それらが発生する基盤としての、あるいはそれらの総合としての社会をトータルに見ていかなければならないと考えたのです。かれの理論そのものは今では批判されてあまり顧みられませんが、かれの実践的な目的にささえられた《そもそも、社会とは何か》という問いはその後もひきつがれて、社会学永遠のテーマとなっています。

コントのあと多くの社会学者が輩出していますが、《社会とは何か》への最終的な解答はもちろん出ていません。それでもおおよそのコンセンサスがあります。そのひとつは、社会とは《非合理的》な人と人との結びつきによってはじめて可能となる、というものです。わたしたちの社会のタテマエは《合理的》なものです。平等に理性をわかち持った個人々が、安

全に生きていくために、合理的な判断のもと、互いに契約を結んで作りあげたのがこの近代社会であり、法はいわばその契約書である、というのがタテマエです。しかし、わたしたちの実際の社会は合理的な計算だけでは存続しません。損得勘定を無視した《情的》な関係——情愛的関係から顔見知り程度の淡い関係まで——こそが、実は社会を一番根っこところで支えていると、社会学は考えます。

唐突のようですが——いえいえ、お待たせしました——、季節柄《お花見》なども、社会を維持するうえで結構大事な役割をはたしているのです。お花見の起源は、桜の花を稲の花の象徴と見て、稲の豊作を占い祈るという「予祝」のお祭りであるとか、田植えの資格をえるための少女の「成女式」のお祭りとか、あるいは桜の花の散る様子を疫病の流行するさまにたとえて悪疫封じをする「鎮花祭」——今でも京都の紫野にある今宮神社では《やすらい祭り》と称して四月の第二日曜日におこなわれています——であるなどといわれています。そして、今日のような単なるたのしみとしてのお花見は、宮中では平安時代頃にはもう催されていたようです。『源氏物語』に「花の宴」という章があります。室町時代の『太平記』に

は「落花の雪に踏み迷ふ交野の春の桜狩り」という名文句もあります。しかし、庶民のあいだで一般化したのは、落語の「長屋の花見」でもおなじみのように、江戸時代からのようです。

共同体において重要な《儀礼》としておこなわれたにせよ、季節の楽しみとしておこなわれたにせよ、お花見は集合的で非日常的な《ハレ》の時間・空間をつくりあげていました。みんなが集まって一緒においしいものを食べ、酒のみ、歌をうたい、踊りをおどるといった情緒的な共通体験をつうじて、人びとは互いに同じ共同体の仲間であることを《からだ》で実感するのです。このことは、今でも変わりません。東京の上野公園では桜が咲きはじめると、昼間から背広姿の若者がシートにねころんで一人漫画を読んでいる光景を目にします。これは入ったばかりの新入社員がお花見の場所とりにしているのです。つまり、お花見の主体は共同体から会社に移ったわけです。しかし、どちらにしろ、お花見はそれぞれの集団の結束を、社会学の用語では「成員の連帯」と「集団の統合」を高めるのに一役買っているのです。

さきほどのコントの後継者であるエミール・デュルケムはこうして大騒ぎを「集合的沸騰」と名づけています。集団や社会が活気にみちて持続し、その本来の機能（合理的なものであっても）を発揮するためには、非合理的な集合的沸騰が周期的にくりかえされる必要があるのです。お花見はそのひとつにすぎませんが、おかげさまでいえば、企業組織の、ひいては日本社会の統合と成員の連帯、一体感の醸成に寄与し、今日わたしたちの豊かさをささえる（ささえられているのではありません！）重要な契機となっているのです。日本のために桜の木の下で沸騰しませんか。



ゼミ紹介

国際経済学

助教 秋元 明

私のゼミナールは、ここ当面経済学部の学生として必要最小限度身に付けておいてもらいたいと思われ基礎的な経済理論を先ず十分に習得することに主眼をおいて活動している。これは応用経済学としての国際経済学独自の複雑性や困難性のために、十分な理論的背景がなくてはその理解が不可能で中途半端になると思われるからである。もちろん経済現象は強い国際的連関を持っており、現実の国際的感覚抜きには国内の経済現象の持つ真の含意やその影響を把握することは不可能である。従って学習と並行して国際的な事件や経済現象に常に関心を持ち、国際感覚を磨くことは経済学徒として重要なことである。従って学生諸君には日頃から新聞や雑誌などによって国際的な経済現象には十分なる関心を持ってもらいたいと考えている。理論的能力が身に付けば、現実の国際経済現象を感性的レベルから理論的なレベルで分析することができるようになるだろうとの考えからである。

このため我々のゼミ活動ではミクロとマクロの理論を一年毎に交互に取上げ、一定のテキストを選び、3・4年合同で同じテキストを研究していくというスタイルを取る。幸い当ゼミの受講生は少数なので、濃密な人間関係が築けるものと考えている。具体的には三年と四年生からなるグループを4ないし5つ程度作り、毎回の授業では各グループ毎に研究した成果をレジュメを切って発表し、全グループの積極的な討論への参加によって経済理論の論理、構造、深遠、現実対応力、あるいはその面白さに触れてみたいと考えている。昨年度は主にマクロ経済学に焦点を合わせたゼミ活動を展開した。そのため薄く簡単なテキストを用いたが、学生の教科書に対する評判は余り良くなかったため、今年度は適当に厚いテキストを用いる予定である。なお来年度の発行に向けて私は現在教科書を鋭意執筆中であるので、来年度以降は外書を除いて他人のテキストは順次使わないようにしていく予定である。

今年度は精緻なミクロ経済学に焦点を合わせる予定である。また学生諸君には自主的なゼミ活動、難解な理論に直面して、大いに頭を悩ませ脳味噌を活性化してもらいたいと考えている。昨年一年間のゼミ活動を通じて感じたことは学生諸君が学問研究に関して非常に受動的だということである。ある命題に関して理解してもしなくても、そのことに関する自分の見解が披露されなければゼミの発表は形式に流れてしまい、ゼミ活動の利点はほとんど失われてしまうことに十分留意してもらいたい。そのためには単に教科書を理解するだけではなく、積極的にその他の参考書や辞書に当り、友人達と議論をしてももらいたい。発表者が分からないことを安直にすぐに教師に尋ね、回答があればそれで済ませまいというのではいかにも安易すぎるのではないだろうか。もちろんこれは教師が回答の労力を惜しんでいうわけではない。安直なやり方では議論が深まらず、ゼミも講義と同じになってしまいゼミナールの良さが発揮できないからである。当ゼミでは今年はこのあたりの活性化に力を注ぎたいと考えている。

さて密度の濃い勉学はゼミ活動の一つの魅力であるが、もう一つゼミの持つ利点はともすれば、大勢の学生の中で失われてしまいがちな豊かな人間関係の形成にある。これはゼミ員が余り多過ぎたり逆に少な過ぎても難しいものであるが、この点幸か不幸か当ゼミは小人数精鋭なので、学生諸君同士でも互いの顔と名前が一致してお互い和気藹々とやっているようである。ただほとんど全員が車通学であるので、放課後ゼミ員達が酒を酌み交すといったことはないようであり、この点は古いタイプの教師としてはいささか残念でもある。もっともこれは学校の周りに学生のたまり場となり得るような喫茶店や麻雀荘あるいはブルバールなどがないということにも起因する。またなにより学内に講義の空き時間に学生同士でおしゃべりを楽しめるような学生会館や落着いたロビーのようなものもないので学生諸君には誠に気の毒なことでもあろう。しかし学生諸君には何とかこうしたハンディキャップを乗り越えて青春の一時期を自然豊かな柏崎の地で勉学に遊びにまた友情に思う存分充実した学生生活を謳歌してもらいたいと考えている。



編集後記

広報委員 中村 真一

早いもので本学も来年度は全学年が揃い、千名をこえる学生が集うこととなります。いよいよ四年制大学として、その真面目・実力を十分に発揮する時が来ました。新四年生の就職活動は、そのことを示す第一歩です。本学は、本県唯一の社会科学系四年制大学として開学当初より地域社会はもとより県内外からの熱い視線が寄せられています。第一期生の活躍が大いに期待されるところです。

ガンバレ！ 一期生諸君。さて、本年度をふり返ってみますと、本学初の海外研修を実施したことが、大きな成果の一つにあげられます。北アリゾナ大学への夏季短期留学の模様は、本編で紹介してありますので、ぜひ、ご一読を。一方、平成元年五月にハルビン師範大学との交流協定を締結したことは既報のとおりですが、現在交換留学生として四名（男子二名女子二名）の学生が留学中です。

留学を体験することによって、異文化に触れ、それを契機に急速に自らのアイデンティティを意識することになるのかもしれない。「自分」と「自分の国」を改めて知ろうとすることが、「国際人」の第一歩のようにも思えます。

いずれにしても、若者には無限の可能性があることは確かです。本学は、学生の主体的な行動を応援していくとともに、その活躍を学報で皆様にお知らせしていくつもりです。乞う御期待。